



「青空浪士」(昭和12年) 大友柳太朗友の会編『大友柳太朗快伝』(ワイズ出版)より



「大地の侍」(昭和31年)のスナップ 左は佐伯清監督
大友柳太朗友の会編『大友柳太朗快伝』(ワイズ出版)より

大友柳太朗

八塚 進

Susumu Yatsuzuka

愛媛の映画人

時、まさに昭和十一年、彼二十四歳の時、スカウトされて、新興キネマに入る。

新興キネマには時代劇の御大が二人、市川右大衛門、片岡千恵蔵が居る中へ、名もまだ余り知られていない若き新人大友が新国劇からスターとして迎え入れられたのである。一般には、今度入る新人大友とは、どんな奴かと半ば好奇と半ばやつかみ、ねたみを以て迎えられたのである。

当時は一般に自家用車等ない時代に東京から大阪へ新聞社の飛行機を借り切って乗りつけ、新興社の総女優の出迎えの中、自家用車でパレードしてアッと衆人のど肝を抜く映画入りを果たしたのである。

彼のデビュー作は「青空浪士」だった。

悪臣に国を追われて流浪、酒に明け暮れる中にも片時も忘れ得ぬ姫君、その危機を知るや韋駄天……のロマンス映画、続いて山田五十鈴共演の「吉田御殿」では千姫を狙う坂崎出羽守の遺臣役を演じてヒットし、まずま

ず順調なすべり出しを遂げ、「佐賀怪猫伝」を鈴木澄子と共演し、これが当たりして、新興の怪猫騒動をお家芸にするに至ってスターの座を確保するに至ったのである。

彼が新興に入る前に居った新国劇は澤正の後を受けた島田省吾と辰巳柳太郎の興した劇団で中富正三が松中卒業した年、その劇を観て感激して入門したのだった。始めはかねて私淑していた中学の先輩伊藤大輔の名をもらって中富大輔へと名乗り、新国劇で研究生、大部屋俳優に昇進し、師匠の推薦を受けて新興キネマ入りしたのだった。

しかし戦争の進展と共に彼も応召を受け、北支に転戦、昭和二十一年帰還、以後地方巡業に明け暮れる日々を送る。その間二十三年、松山宇和島を訪れ、「新国劇」でおなじみの「国定忠治」を主演する。

昭和二十五年時代映画が解禁され映画界に復帰する。心機一転「大友柳太郎」を「郎」を「朗」に改め、「大友柳太朗」と改名する。